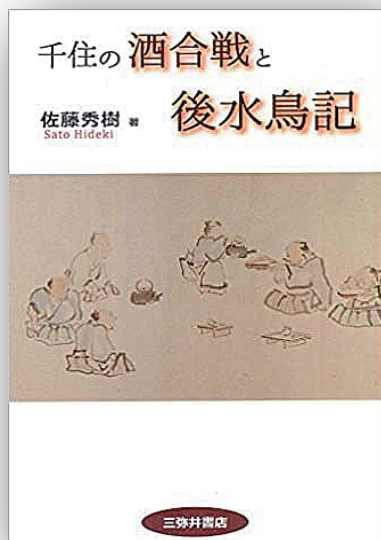


新収蔵資料抄



最寄り図書館に取り寄せ可

資料概要

酒合戦は飲酒の量を競い合う催事で、延喜 11(911)年の亭子院酒合戦や、酒井雅楽頭の侍医、茨木春朔が酒豪の名をはせた慶安元(1648)年の大師河原酒合戦などが知られる。「千住の酒合戦」はそうした著名な酒戦の一つで、その有様を伝える『後水鳥記』は、最盛期の江戸町人文化をよく伝えるものとしても興味深い。

千住の酒合戦は、文化 12(1815)年に、現在の足立区千住の飛脚宿の隠居中屋六右衛門が還暦祝いの余興として約 100 人を招待して行ったもので、見分役として文人、例えば、本県ゆかりでもある儒者・亀田鵬斎をはじめ、絵師の酒井抱一、谷文晁らも招かれた。酒の肴はからすみ、花塩、さざれ梅、カニ、ウズラの焼き鳥など。酒は辛口で人気の伊予の「玉緑」。柳橋の名妓が給仕する華やかな宴だったという。

予め申告した量までを飲む趣向で悪客も断るなど、合戦と銘打つものの節度ある酒宴だったが、6 升、7 升も飲んだ猛者もいた。

この酒宴を狂歌師の蜀山人こと大田南畝が戯文に仕上げたのが『後水鳥記』で、書名は当時多くの同時代人に読まれていた大師河原酒合戦顛末の仮名草子、『水鳥記』に因んでいる。(いずれも「酒」の漢字を「ヰ」と「酉」とに解き、「水」と「鳥」を充てた洒落。)

『後水鳥記』は、その刊行直後に著されたと考えられる図巻『高陽闘飲巻』(高陽は酒豪のこと)など、流布本、別本も知られており、本書は、現在に伝わる 22 に及ぶ草稿、流布本、別本を渉猟し、字句文言を詳細に比較検討することで、それぞれの系統や成立の経緯、推敲の過程と、『後水鳥記』の本来の姿を明らかにしている。

千住の酒合戦と後水鳥記

佐藤秀樹／著 三弥井書店 2021.1 発行
4, 226p 図版 16p 19cm 914.5/ ネ 11 2021.4.16 受入
定価 2700 円＋税

目次

- 第一章 千住の酒合戦とは
- 第二章 水鳥記から後水鳥記へ
- 第三章 文化十二年の酒合戦を読み解く
- 第四章 亀田鵬斎「高陽闘飲序」を読み解く
- 第五章 鯉隠居と謝肇淛『五雜俎』のかかわり
- 第六章 後水鳥記の草稿と闘飲図巻を見くらべる
- 第七章 一枚刷り闘飲図と酒戦会番付
- 第八章 小山田与清『擁書漫筆』にみる千住の酒合戦
- 第九章 文化十四年の書画会での飲みくらべ
- 第十章 摺物「弥勒布袋図」と『仏説摩訶酒仏妙楽經』を読む
- 第十一章 二つの闘飲図巻の成立

あわせて、成立の契機となった酒合戦の様子はもちろん、文人同士の交流、当時に流行した書画会や同好の士の集まり「連」の様子など、文人を取り巻く当時のサロンのような雰囲気も味わえる。

著者紹介

佐藤秀樹(さとう ひでき) 1950 年東京都生まれ。立正大学文学部卒業、放送大学大学院修士課程修了。
1986 年足立区立郷土博物館開館記念「足立と北斎展」担当。
1987 年足立区立郷土博物館一周年記念「千住の酒合戦と江戸の文人展」担当。

県立図書館で読める「水鳥記」、「後水鳥記」

「水鳥記」「後水鳥記」				資料コード
江戸叢書 巻の 7	江戸叢書刊行 会編集	鳳文書館	1992	07643430
「水鳥記」				
假名草子集成 第 42 巻	深沢秋男 編	東京堂出版	2007	17408154
「後水鳥記」				書誌 ID
江戸叢書：12 巻、巻の七	江戸叢書刊行 会 編	江戸叢書刊 行会	1916- 1917	000000874262※
「水鳥記」				
近世文芸叢書 第 3	国書刊行会編	国書刊行会	1910- 1912	000001118607※
仮名草子 下	水谷不倒 編	大洋社	1925 再版	000001248326※

※の資料は、国立国会図書館デジタルコレクション(図書館送信)

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料(図書資料・視聴覚資料)から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。

なお、本紙の内容は Web にも掲載しています。ご覧の際は右の QR コードをご利用ください。

また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

